

研究成果報告書

(国立情報学研究所の民間助成研究成果概要データベース・登録原稿)

研究テーマ (和文) AB		奥羽山脈栗駒山周辺におけるオオシラビソを中心とした植生変遷			
研究テーマ (欧文) AZ		The vegetation change mainly on <i>Abiesii mariesii</i> around Mt. Kurikoma, Ouu mountains			
研究氏 代表 者	カナ CC	姓)ワカマツ	名)ノブヒコ	研究期間 B	2007 ~ 2009 年
	漢字 CB	若松	伸彦	報告年度 YR	2009 年
	ローマ字 CZ	WAKAMATSU	Nobuhiko	研究機関名	東京農業大学
研究代表者 CD 所属機関・職名		東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科博士研究員			
概要 EA (600 字~800 字程度にまとめてください。)					
<p>亜高山帯域に針葉樹林帯を欠いた栗駒山において、過去の植生変遷を明らかにするため複数の湿原において堆積物の状況および堆積物中の花粉化石の分析をおこなった。</p> <p>周辺地域で唯一のオオシラビソ小林分に隣接した稜岳湿原で花粉分析をおこなった。その結果、この林分は数千年前から微小な林分を維持しながら生育してきたことが示された。その一方、稜岳と同標高帯にあって周囲にオオシラビソが存在しない龍泉ヶ原湿原では、モミ属は全層位を通じてみられず、ブナ属、コナラ亜属、ヤシャブシ亜属の検出割合が大きく、最表層ではスギ属が最も優勢であった。これら特徴は稜岳における分析で完新世中後期と推定した時代の変化ときわめて類似していた。</p> <p>山地帯上部の「泥炭地」と通称される湿原では、主に強酸性水中に生育するウカミカマゴケ由来である泥炭が 4m 以上堆積していた。この泥炭試料を用いた花粉分析により、最下部から表層部までブナ属が優勢でコナラ亜属やカバノキ属などが随伴していたが、亜寒帯針葉樹の花粉はどの層準からも検出されなかった。また、地表面から約 2.5m~4.0m の層内において、極めて保存状態が良好な植物遺体が大量に発見され、その多くはブナの葉片であり、葉の大きさは現在栗駒山周辺でみられるものと比べて小型であった。一方で、針葉樹種の痕跡は全くみつからず、現在湿原周辺に多くみられる植物種のみであった。これら葉片を用いて年代測定をおこなった結果、3600~4140yrBP という値を示した。このことから、約 4000 年前から現在まで周辺に亜寒帯針葉樹林はみられず、ブナを主体とする落葉広葉樹林が継続してみられたことが示された。</p> <p>これら結果から、栗駒山周辺では過去数千年間針葉樹林が広く生育していたことはなく、植生は大きく変化しておらず、現在に至っていることが示された。その一方、ブナの葉の形態が現在と 4000 年前のものとは大きく異なっており、その要因については更なる検討が必要と考えられる。</p>					
キーワード FA	植生変遷	花粉分析	亜高山帯	ブナ	

(以下は記入しないでください。)

助成財団コード TA					研究課題番号 AA								
研究機関番号 AC					シート番号								

発表文献（この研究を発表した雑誌・図書について記入してください。）									
雑誌	論文標題 ^{GB}								
	著者名 ^{GA}		雑誌名 ^{GC}						
	ページ ^{GF}	～	発行年 ^{GE}					巻号 ^{GD}	
雑誌	論文標題 ^{GB}								
	著者名 ^{GA}		雑誌名 ^{GC}						
	ページ ^{GF}	～	発行年 ^{GE}					巻号 ^{GD}	
雑誌	論文標題 ^{GB}								
	著者名 ^{GA}		雑誌名 ^{GC}						
	ページ ^{GF}	～	発行年 ^{GE}					巻号 ^{GD}	
図書	著者名 ^{HA}								
	書名 ^{HC}								
	出版者 ^{HB}		発行年 ^{HD}					総ページ ^{HE}	
図書	著者名 ^{HA}								
	書名 ^{HC}								
	出版者 ^{HB}		発行年 ^{HD}					総ページ ^{HE}	

欧文概要^{EZ}

This study was analyzed situation of the sediment and a pollen analysis in the sediments in some moors, to clarify the past vegetation change in Mt. Kurikoma where lacked in coniferous forests zone in subalpine area.

As a result of the pollen analysis at Magusadake moor where approached the small *Abies ariesii* forest, the forest was it continuously for several thousand years.

On the other hand, in Ryuusen moor where no fir forest to circumference in a altitude same as Magusadake moor, A pollen detection ratio of *Fagus*, *Quercus* and *Alnus* was big, and *Cryptomeria* was the superior on the most outer layer. But the *Abies* pollen was not watched through all layers.

On the Deitanchi moor at the upper part of montane belt, the peat of *Drepanocladus fluitans* origin accumulated more than 4m. *Fagus* pollen was superior in all layers in this moor, and the pollen of the subarctical conifer was detected from all layers.

In addition, the plant corpse that state of preservation was extremely good was discovered in large quantities than about 2.5m - 4.0m depth. The most were *Fagus crenata* laminas and the size was smaller than the leaves which there are around the present, in other hand the trace of the conifer species was not found at all. The radiocarbon dating result of these laminas was 3600 - 4140yrBP.

From these results, there was not the fact that coniferous forest exist widely, and vegetation did not change greatly around Mt. Kurikoma for the past several thousand years.